

令和六年度入学試験問題

国語（国語総合・現代文B・古典B）

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
- 三、解答用紙は八枚です。
- 四、各解答用紙には受験番号を記入する欄がそれぞれ二箇所あります。二箇所とも記入しなさい。
- 五、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

書物を読むことも持つことも禁じられたら、どうなるか。

フランソワ・トリュフォーの映画『華氏451』(一九六六)は、読書が禁止され、TVだけがメディアとなった近未来社会を描いた。極度に管理が進み、この世からあらゆる書物が追放される。しかし、発見次第、本を焼却するはずの焚書官ふんしょくわんが、読書する女性に出会い、書物の素晴らしさに目覚める。読書の喜びを知った焚書官は今や反逆者。逃走の末、教えられた秘密の共同体にたどり着く。そこでは、暗誦あんじゆすることで、古今東西の書物を次代に伝える(1)ブッククープル(本の人たち)が暮らす。たとえ官憲に見つかっても、書物の内容が頭の中にあるのだから逮捕されることはない――。

映画の原作は『火星年代記』で有名なレイ・ブラッドベリの小説『華氏四五一度』。時代がテレビへ流れて行く状況に警告を発する一方で私たちの本への執着の強さを描いた。

ブッククープルはブラッドベリの空想の産物だが、何よりも、私たちと本の関係がただ事ではないことを伝えている。テレビが万能となり、読書が罪悪となる状況で、命がけて書物を残そうとするブッククープルに私たちは共感せざるを得ない。私たちは誰でも多かれ少なかれ「知は力だ」ということを知っており、読書は、私たちの知的活動の中心に位置するからだ。

それにしても、書物が禁じられても、丸ごと記憶することで書物の内容を所有するという対抗措置には驚く。そこまでして、私たちが書物に愛着を持つのはどうしてか。書物という知的財産を所有するとはどういうことか。

書物を得るのが困難な時代に、読書に想い焦こがれた人はどんな気持ちでいたのだろうか。これには、我が日本の平安時代に実在した女性の証言がある。『更級日記』(一〇五九ごろ成立)の作者菅原孝標女は、ようやくの思いで紫式部の『源氏物語』を手に入れた、読みふける時の至福を書きとめた。孝標女が育った上総かずさの国には書物らしい書物がなく、母や姉からうる覚えの『源氏物語』の触さわりだけを聞いて育つ。『源氏』を死ぬほど読みたくて、周りの大人にねだるがかなわない。しかし、地方官の父の任が切れて

京に引越した時、ようやく親類宅で念願の『源氏物語』の写本をもらおう。孝標女、十四歳の時のこと。『源氏』をもらったその帰り道での得意の様子を「嬉しさぞいみじきや」と記している。それから、五十四帖全部を昼夜ぶつ通して読みふける。死ぬほど読みたくて、憧れた書物に触れる喜びを、「(源氏物語を)見る心地、後の位も何にかはせむ」(源氏を読む気持ちといったら、皇后の位だって比べものにならない)と日記の中で吐露した。俗な言い方をすると、「読書は王座とも交換できない」と。

書籍や雑誌であふれる現代では、こんなにせっぱつまった読書への憧れは想像しにくい。今では、書店やインターネットで目当ての本はたいてい手に入る。絶版となった本でも、図書館でなんとかなる。この意味では、当時、経済的に豊かな受領階級のインテリ層で、まして菅原家という学問や文学の家柄の孝標女が、『源氏』を手に入れるのは単に時間の問題だったかもしれない。それでも、このエピソードは、読み物が乏しい状況で読書好きの人がいかに書物に焦がれたかをよく伝えている。

しかし、大昔、本がなかったころ、物語は口承で伝えられたため、私たちは物語を手に入れ、我が物とすることができなかった。物語を知っている人かブックピープルのように物語を暗誦した人から聞くしかない。

古代ギリシアやローマでは、『イリアス』や『オデュッセイア』など英雄物語は、吟遊詩人が朗詠するのを聞くことでしか享受できなかった。日本でも琵琶法師が『平家物語』などの軍記物語を口承で伝えた。つまり、書物が存在しなかったり、存在しても文字が読めなければ、物語を知っている人を通してしか、作品にアクセスすることは不可能だった。この意味で、知的財産を所有していたのは、漂泊の詩人や琵琶の弾き語りをした僧形の旅芸人である。彼らは「知」の対価として、祝儀とともに一宿一飯の持てなしを受けた。時には権力者の酒宴にも招待されただろう。

『イリアス』や『オデュッセイア』はホメロスが作ったことになっているが、ホメロスについては生まれや生涯について何も分かっていない。また、『平家物語』の作者も特定できないと言われている。つまり、物語の作者の影は薄く、作品を伝える乗り物としての吟遊詩人や琵琶法師こそが知を思いのままにした。誰もが旅ができるわけではない時代に、そうやって旅を人生とした。知を所有することで、旅する自由^②という特権を手にしたのだ。

紀元前三世紀のヘレニズム時代、ギリシア文化とオリエント文化が融合した地中海のコウワン都市アレクサンドリアに壮大な^①

図書館が設立された。

創設以来、地中海世界を照らす「知」の灯台であり続けたアレクサンドリア図書館は、蔵書を獲得することに最大の努力が注がれた。印刷術がない時代だから、書物を増やすには写本するしかない。アレクサンドリアに停泊した各国船には立ち入り検査が行われ、本があれば直ちに一時預かりの対象になった。預けられた本はすぐに筆写され、写本が終わると返却された。こうやってアレクサンドリア図書館はコレクションを増やしていった。蔵書数は七〇万冊に達したという。この世界最古の図書館の最大の偉業は、ヘブライ語の『旧約聖書』をギリシア語に翻訳したこと。この翻訳作業のおかげで、キリスト教が世界宗教に発展して行く②イシズエが築かれたと言われている。

ところが、このアレクサンドリア図書館は、その後、歴史から忽然と姿を消してしまう。遺跡や遺構など現存するものは何もない。パピルスや羊皮で作られた高価で貴重な万巻の蔵書も、壮大な建物と一緒に壊滅してしまった。その時期については、紀元前四八年のアレクサンドリア陥落時という説や、六四一年のアラブ人によるエジプト攻略時という説があり、七〇〇年もの幅があつて確定できない。壊滅の原因もよく分からない。戦乱による火災説がよく取りざたされるが、地震説もあり、権力者同士の内紛による打ちこわし説もある。古代アレクサンドリア図書館の最後は謎に包まれたまま今日に至っている。

いかにして万巻の書が消え去ったのか、どんな書物が収蔵され、いかに管理されたのか、目録カードはあつたのか、好奇心が刺激される。しかし、そもそもなぜ、このような図書館が作られたのだろうか。森羅万象を凝縮した「知の宝庫」を持つことで私たちの遠い祖先は何を夢見たのだろうか。

中世ヨーロッパでは、写本は「知」の中樞を担った教会や修道院で行われた。ギリシア・ローマ時代と違って、写本は薄暗い僧院の書写室で細々と行われていた点だ。シヨン・コネリー主演の映画『薔薇の名前』（一九八六）を観た人なら、殺人事件の舞台は修道院の書写室だったと言えはイメージが描きやすいだろうか。

本は宝だった。教義を厳格に伝えるため、徹底的に訓練された写本僧によって丹精込めて複写された。本は工芸品もしくは美術品でもあり、豪華さと洗練が求められた。濃紺や深い紫に染められた羊革の表紙に金箔文字が威厳を放つ。赤や青、緑の宝石

をあしらったものもある。一部しかないオリジナル(原本)を写本僧たちが複写する。羊革や紙、インクなど貴重資源を使う。量産できなかつたため、その情報を所有し、管理する者は読者を限定した。書物は修道院や教会や大学だけで読むことが可能であり、盗み出されることを恐れて、鎖で本を書棚に結びつけたという記録もある。また、今日のようにアルファベットで本を分類する方法がなく、仲間内だけで勝手に整理したため、文書室の管理者だけが、本の所在を把握していた。コネリー演じる探偵役の修道士にとって、無数の本の保管庫はまさしく知と書物の迷宮世界だった。

このように、本へのアクセスは極端に限られた。読み書きの学校すら満足にない時代だから、「知」はカトリックの聖職者や権力者が独占していたことになる。それゆえ、後に、グーテンベルクたちの印刷術(一四五〇年ごろの発明)が宗教改革への道筋をつけたことにスポットライトが当たると、「知」が大量の印刷物となつて教会や修道院、大学などの密室から世に放たれたのだから。「宗教改革は印刷術の子ども」と言われるのはこのためだ。

当時は書物に閉じ込められた「知」を所有し独占することで社会システムを維持することが可能だったとも言える。その際、「知」の作者が誰であったのかはさして重要ではない。トマス・アクィナス(一二二五頃〜七四)が力を持ったのではなく、^(注2)『神学大全』を所有した者が力にした。この世を規律し、統治する正当性を主張し、記述できるのだから、書物以上に貴重な宝はないだろう。書物が金箔文字や宝石で飾られるのも無理はない。権力者は知っていたに違いない、⁽³⁾「本は宝である。しかし、それ以上に知は力である」と。

宗教改革が進行する一方で、ヨーロッパでは重苦しい教会の権威からの離脱を図る「人文主義」の活動が起きてきた。カトリック教会から解放された自由な人間像を古代ギリシアやローマの古典に求めて、それまで埋もれてきた文献の復活を目指した。その結果、人文主義者と印刷業者が手に手を携えて、⁽³⁾各地の図書館で死蔵された書物を探し回り、大量の印刷物が作られた。「知」の百花繚乱の時代が始まる。

ブリュノ・ブラセル著『本の歴史』(木村恵一訳、創元社、一九九八)によると、一六世紀のリヨンやアントワープの印刷工房で

は、職人が朝の五時や六時から夜七時や八時まで働き、一日三〇〇〇枚の印刷をするというノルマまであったことが記録に残っている。

ルネサンス期には出版物にもバラエティーが出てくる。物語や詩歌だけでなく、大航海時代を反映した冒険譚^たが人気を博した。占星術など各種の占い本も流行り、「ノストラダムスの予言書」も版を重ねたとされる。一八世紀になると、本は、啓蒙思想の普及に手を貸し、後に続く市民革命を準備した。本は市民にも買える商品となり、新聞や雑誌など定期刊行物も現れた。「知」は多くの人に共有されることで力を持った。その後、印刷術の進歩以外にも、紙やインクの絶えざる技術革新と輸送手段の発達のおかげで、書物はあまねく広まった。

重要なことは、市民社会の成立以降、「個の自覚」が生まれ、著作者の概念が徐々に形成されたことだ。本が運ぶ「知」に著者名が付され、著作権システムが整ってくる。つまり、作品の財産的価値が法的に認められ、海賊版すなわち他人の本の無断出版が取り締まられるようになる。こうなると、「知」は法的には著作者や著作権を管理する人や団体の所有となる。作品に対して最高の力を持つのは作者であって、作者の許可がないと、出版も上演もできない。いくら自分で金を払ったと言ったって、買った本を基に無断で「複製本を作ったり」「映画を作る」ことは違法となる。⁴二一世紀に生きている私たちは基本的にこの延長線上にいると言つてよい。

(中略)

そもそも、書物を読むことはどういうことか、「知」を所有するとはどういうことか。書物を読めば普通、そのテーマ、ポイント、狙い、あらすじを掴^{つか}むだろう。だが、これが「知」を所有することだろうか。それとも、一言一句をカンペキ^④に吸収し、いつでもすぐに再現できることが所有を意味するのか。あるいは、作者すらも気づかない作品の背景や時代思潮や地域性を読み取ることが知の所有なのだろうか。

答えは容易には得られない。他人が書いたものを十全に理解することは、その人を理解するのと同じで容易ではない上、読書には、読み手の知識や感性、経験が自ずと反映されるからだ。さらに、読み手の読書への姿勢や時間、情熱の違いで、内容の咀嚼^⑤の程度も違ってくるだろう。ウィンブルドンで優勝した選手に習ったからと言って、必ずしも一流のテニスプレーヤーにならないのと同じだ。受容する側のキャパシティが大きな問題になる。

おそらく、「知」の所有は、「私のホメロス」「あなたのホメロス」「彼女のホメロス」という具合に、読む人に応じた無数のバージョンの形でしか実現できないのではないか。寶石なら、誰の手に渡っても、同じ輝きが保証される。しかし、知はそうはいかない。読み手によって千変万化する。そもそも、書物に触れたからと言って、知が得られるかどうかも怪しい。

それでも、私たちが、書物に執着するのは、書物の中に「知」という力を秘めた何かを捕まえることができるかもしれないと期待するからだろう。その力があれば、王座以上の喜びや、世界を支配する力を手に入れることが可能になるかもしれないのだから無理はない。未だ見ぬ書に想い焦がれた『更級日記』の著者も、古代アレクサンドリアに図書館を作った私たちの遙かな祖先も、持ち出されるのを恐れて書物に鎖をかけた僧侶も皆同様に、信じていた。知に力があり、知が自己や現状や世界を大きく変えるかもしれないことを。

電子書籍の時代においては、本が今以上に私たちのまわりにあふれるだろう。トリュフォーの映画では、本が消えた社会にブックレビューが登場させることで、私たちが知の力を発見する可能性を維持しようとした。では、書物が洪水のようにあふれる時代の対抗措置は何か。^⑤ 私たちはいかにして知を追跡し、捕まえることができるのだろうか。

(宮武久佳『知的財産と創造性』より。出題の都合上、一部改変している。)

注1 写本——手書きによって写した書物。

注2 『神学大全』——神学者トマス・アクィナスによる、キリスト教三大古典の一つ。神・人間・キリストについて論じた。

注3 ウィンブルドン——ウィンブルドン選手権。国際テニス連盟が定めた四大大会の一つ。

問一 傍線部①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。

問二 傍線部(1)「ブックピープル」とあるが、本文中に挙げられた、さまざまな人(々)の本への関わり方の例の中で、「ブックピープル」の関わり方に最も近いものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 書物らしい書物のない地方で生まれ育ち、知人から聞いた『源氏物語』を死ぬほど読みたいと焦がれた菅原孝標女の、本への関わり方。ついに読めるようになった時には昼夜を問わず読みふけり、その嬉しさを「見る心地、後の位も何にかはせむ」と『更級日記』に書き残した。

イ 印刷術のない時代に、書物を増やすために写本をし、蔵書を獲得することに最大の努力をしたアレクサンドリア図書館の人々の、本への関わり方。停泊した船には立ち入り検査が行われ、本があれば一時預かりをして筆写し、七〇万冊ともいわれるコレクションを築いた。

ウ 薄暗い僧院の書写室で写本を作った、中世ヨーロッパの僧侶たちの、本への関わり方。金箔文字や宝石をあしらった豪華で美しい本を作ったが、量産することができなかつたため、盗み出されることを恐れて鎖で本を書棚に結びつけ、本へのアクセス・読者を限定した。

エ ルネサンス期に、本が自分たちにも買える商品となったことで、さまざまな出版物を楽しんだ読者の、本への関わり方。大航海時代を反映した冒険譚、各種の占い本、「ノストラダムスの予言書」などを楽しみ、本・新聞・雑誌などから市民革命に必要な知識を手に入れた。

問三 傍線部(2)「旅する自由という特権」とあるが、これはどのようなものか、その時代背景を含めて、詳しく説明せよ。

問四 傍線部(3)「本は宝である。しかし、それ以上に知は力である」とあるが、この時代に「知」が「力」であった理由を、簡潔に説明せよ。

問五 傍線部(4)「二一世紀に生きている私たちは基本的にこの延長線上にいてと言ってよい」とあるが、これはどういうことか、一〇〇〇字程度で説明せよ。

問六 傍線部(5)「私たちはいかにして知を追跡し、捕まえることができるのだろうか」とあるが、「私たち」はなぜ「知」を捕まえるようにするのか、本文中の語句を用いて、簡潔に説明せよ。

二、次の文章は、一九三八(昭和十三年)に発表された岡本かの子の「蔦の門」である。これを読んで、後の問いに答えよ。

私の住む家の門には不思議に蔦がある。今の家もそうであるし、越して来る前の芝白金の家もそうであった。もつともその前の芝、今里の家と、青山南町の家とには無かったが、その前にいた青山穂田の家にはやはり蔦があった。都会の西、南部、赤坂と芝とを住み歴る数回のうちに三カ所もそれがあるとすれば、蔦の門には余程縁のある私である。

目慣れてしまえば何ともなく、門の扉の頂より表と裏に振り分けて、若人の濡れ髪を干すように門の辺まで鬱蒼と覆い掛り垂れ下る蔓葉の盛りを見て、ただ涼しくも茂るよと感ずるのみであるが、たまたま家族と同伴して外に出で立つとき誰かが支度が遅く、自分ばかり先立つて玄関の石畳に立ちあぐむときなどは、焦立つ気持ちはこの葉の茂りに刺し込んで、強いて蔦の門の偶然に就いて考えてみることもある。

結局、表扉を開いて出入りを激しくする職業の家なら、たとえ蔦の根はあつても生え抜がるまいし、自然の做すままを寛容する嗜癖の家族でなければこういう状態を許すまい。蔦の門には偶然に加うるに多少必然の理由はあるのだろうか——この私の自問に答えはハナハだ平凡だったが、しかし、表門を蔦の成長の棚床に閉じ与えて、人間は傍の小さい潜門から世を忍ぶもののように不自由勝ちに出入するわが家のものは、無意識にもせよ、この質素な蔦を真実愛しているのだった。ひよつとすると、移転の必要あるたび、次の家の探し方に門に蔦のある家を私たちは默契のうちに条件に入れて探していたのかも知れない。そう思うと、蔦なき門の家に住んでいたときの家の出入りを憶い返し、丁度女が額の真廂をむきつけに電燈の光で射向けられるような寂しくも気うとい感じがした。そして、従来の経験に依ると、そういう家には永く住みつかなかったようである。

夏の葉盛りには鬱青の石壁にも譬えられるほど、蔦はその肥大な葉を鱗状に積み合せて門を埋めた。秋より初冬にかけては、金朱のいろの錦の蓑をかけ連ねたように美しくなった。霜の下りる朝毎に黄葉朽葉を増し、風もなきに、かつ散る。冬は繊細執拗に編み交り、捲いては縋れ戻る枝や蔓枝だけが残り、原始時代の大匍足類の神経か骨が渴化して跡をとどめているよう

で、節々に吸盤らしい刺立ちもあり、私の皮膚を寒気立たした。しかし見方によっては鋼の螺線らせんで作ったルネサンス式の圖案様式の扉にも思えた。

蔦を見て楽しく爽さわやかな気持ちをするのは新緑の時分だった。透き通る様な青い若葉が門扉もんびの上から雨後の新滝のように流れ降り、その萌黄もえぎいろから出る石竹色せきちくの蔓尖まきの茎や芽は、われ勝ちに門扉の板の空所を匍はい取ろうとする。伸びる勢の不揃いなところが自由で、稚おさなく、愛らしかった。この点では芝、白金の家の敷地の地味はもつともこの種の蔓の木によかったらしく、やわらかく肥ふとった若葉が無数に蔓で絡まり合い、一握りずつの房になって長短を競わせて門扉にかかった。

「まるで私たちが昔かけた房附きの糸の肩掛けのようですね」

自然や草木に対してわり合いに無関心の老婢(注2)のまきまでが美事な蔦に感心した。晴れてまだ晩春の蔦つるたさが残っている初夏の或る日のことである。老婢は空の陽を手庇てびしで防ぎながら、仰いで蔦の門扉に眼をやっていた。

「日によると二三寸も一度に伸びる芽尖があるのですね。草木もこうなると可愛かわいものですね」

性急な老婢は、草木の生長の速力が眼で計れるのに始めて自然に愛を見出して来たものようである。正直ものでもとかく、一徹に過ぎ、ときにはいこじにさえ感ぜられる老婢が、そのため二度も嫁入って二度とも不縁に終り、知らぬ他人の私の家に永らく奉公しなければならぬ、性格の一部に何となくエゴの殻をつけている老年の女がこの蔦の芽にどうやら和なごやかな一面を引き出されたことだけでも私には愉快だった。また五十も過ぎて身寄りとは悉ことごとく仲違いをしまし、子供一人ない薄倅はうせうな身上を彼女自身潜在意識的に感じて来て、女の末年の愛を何ものかに向って寄せずにはいられなくなった性情の自然の経過が、いくらかこんなことでもここに現われたのではないかと、憐れにも感じて、つくづく老婢の身体からだを眺めやった。

老婢の身体つきは、だいぶ老齡の女になって、横顔の顎あごの辺に二三本、褐色の豎筋たてすじが目立って来た。

「蔦の芽でも可愛がっておやりよ。おまえの気持ちの和みにもなるよ」

老婢は「へえ」と空返事をしていた。もうこの蔦に就いて他のことを考えているらしかった。

その日から四五日経た午後、門の外で老婢が、がみがみ叫んでいる声があった。その声は私の机のある窓近くでもあるので、書きものの気を散らせるので、止めて貰おうと私は靴を爪先につきかけて、玄関先へ出てみた。門の裏側の若藁の群は扉を横匍いに匍い進み、崎と崎にせかれて、その間に干潮を急ぐ海流の形のようにでもあり、大きくうねりを見せて動いている潮のようでもある。空間にあえなき支点を求めて覚束なくも微風に揺られている搔きつき刺つた新蔓は、潮の飛沫のようだ。机から急に立上った身体の動揺から私は軽微の眩暈がしたのと、久し振りにあたる明るい陽の光の刺戟に、苦しいより却て揺蕩とした恍惚に陥つたらしい。そのまま佇んで、しめやかな松の初花の樹脂臭い匂いを吸い入れながら、門外のいさかきを聞くと聞かぬともなく聞く。

「ええええ、ほんとに、あたしじゃないのかわ。よその子よ。そしてそのよその子、あたし知ってるよ」

早熟た口調で言っているのはこの先の町の葉茶屋の少女ひろ子である。遊び友達らしい子供の四五人の声で、くすくす笑うのが少し遠く聞える。

「嘘だろー！両手を出してお見せ」と言っただのは老いたまきの声である。もうだいたい返答返しされて多少自信を失ったまきはしどろもどろの調子である。

「はい」少女はわざと、いうことを素直に聴く良い子らしい声音を装って返事しながら立派に大きく両手を突出した様子が藁の門を越した向うに感じられた。忽ち当惑したまきの表情が私に想像される。老婢は「ふーむ」とうなった。

また、くすくす笑う子供たちの声が聞える。

私も何だか微笑が出た。ちよつと間を置いて、まきは勢つき

「じゃ、この藁の芽をちよぎつたのは誰だ。え、そいつでござん。え、誰だよ、そら言えまい」

「あら、言えてよ。けど言わないわ。言えばおばさんに叱られるの判っているでしょう。叱られること判っていないながら言うなんて、いくら子供だって不人情だわ」

「不人情、ははははは」と女の子供たちは、ひろ子の使った大人らしい言葉が面白かったか、男のような声をたてて一せいに笑った。

まきはいきり立って「……この子たち口減らずといったら——」まきの憤慨している様子が私にも想像されたが、すべてのものから孤独へほうり捨てられたこの老女は、やはり不人情の一言にはかなり刺戟を受けたらしい。「早く向うへ行つて。おまえなど女弁士にでもおなり」と叱り散らした。

もう、そのとき、ひろ子はじめ連れの子供たちは逃げかかつていて、老婢より相当離れていた。老婢はまたカイジュウして防ぐに之くはないと気を更えたらしく、強いて優しい声を投げた。

「ねえ、みんな、おまえさんたちいい子だから、この蔦の芽を摘むんじゃないよ。ほんとに頼むよ」

さすがの子供たちも「ああ」とか「うん」とか生返事しながら馳せ去る足音がした。やっと私は潜戸を開けて表へ出てみた。

「ばあや、どうしたの」

「まあ、奥さま、ご覧遊ばせ。憎らしいつたらごさいません。ひろ子が餓鬼大将で蔦の芽をこんなにしてしまったのでございませす。わたくし、親の家へ怒鳴り込んでやろうと思ってるんでございませす」

指したのを見ると、門の蔦は、子供の手の届く高さの横一文字の線にむしり取られて、髪のおかっぱさんの短い前髪のように揃っていた。流行を追うて刈り過ぎた理髪のように軽佻で滑稽にも見えた。私はむっとして「なんとという、非道いこと。いくら子供だつて」と言つたが、子供の手の届く範囲を示して子供の背丈だけに摘み揃っている蔦の芽の摘み取られ方には、悪戯でもやっぱ子供らしい自然さが現われていて、思い返さずにはいられなかった。

「これより上へ短くは摘み取るまいよ。そしてそのうちには子供だから摘むのにもじき飽きるだろうよ」

「でも」

「まあ、いいから……」

ひろ子の家は二筋三筋距つた町通りに小さい葉茶屋の店を出していた。上り框と店の左横にささやかな陳列硝子戸棚を並べ、その中に進物用の大小の円罐や、包装した箱が申訳だけに並べてあつた。

楽焼の煎茶道具一揃いに、茶の湯用の漆塗りの棗や、竹の茶筥が埃を冠つていた。右側と衝き当りに三段の棚があつて、上の方には紫の紐附の玉露の小壺が並べてあるが、それと中段の煎茶の上等が入れてある中壺は滅多に客の為め蓋が開けられることなく、売れるのは下段の大壺の番茶が主だつた。徳用の浜茶や粉茶も割合に売れた。

玉露の壺は単に看板で、中には何も入つてなく、上茶も飛切りは壺へ移す手数を省いて一々、静岡の仕入れ元から到着した錫張りの小箱の積んであるのをあれやこれやと探し廻つて漸く見付け出し、それから量つて売ってくれる。だから時間を待たして仕様がないと老婢のまきは言つた。

「おや、おまえ、まだ、あすこの店へお茶を買いに行くの」と私は訊いてみた。「あすこの店はおまえの敵役の子供がいる家じゃない」

すると、まきは照れ臭そうに眼を伏せて

「はあ、でも、量りがようございますから」

と、せいぜい頭を使つて言つた。私は多少思い当る節が無いでもなかつた。

蔦の芽が摘まれた事件のあつた日から老婢まきは、急に表門の方へ神経質になつて表門の方に少しでも子供の声がすると「また、ひろ子のやつが——」と言つて飛出して行つた。

事実、その後も二三回、子供たちの同じような所業があつたが、しかし、一月も経たぬうちに老婢の警戒と、また私が予言したように子供の飽きつぽさから、その事は無くなつて、門の蔦の芽は摘まれた線より新らしい色彩で盛んに生え下つて来た。初蟬が鳴き金魚売りが通る。それでも子供の声がすると「また、ひろ子のやつが——」と呟きながらまきは駆け出して行つた。

子供たちは遊び場を代えたいらしい。門前に子供の声は聞えなくなつた。老婢は表へ飛出す目標を失つて、しょんぼり見えた。用もなく、厨の涼しい板の間にべたんと坐つておるときでも急に顔を皺め

「ひろ子のやつめ、——ひろ子のやつめ——」

と独り言のように言っていた。私は老婢がさんざん小言を云ったようなきっかけで却って老婢の心にあの少女が絡み、せめて少女の名でも口に出さねば寂しいのではあるまいかとも推察した。

だから、この老婢がわざわざ幾つも道を越える不便を忍んで少女の店へ茶を求めに行く気持ちも汲めなくはなく、老婢のツタ^④ナ^①い言訳も強いて追及せず

「どう、それは好い。ひろ子も鳶をむしらなくなったし、ひいき^②にしておやり」

私の取り做^なしてやった言葉に調子づいたものか老婢は、大^③ひらでひろ子の店に通い、ひろ子の店の事情をいろいろ私に話すのであった。

私の家は割合に茶を使う家である。酒を飲まない家族の多くは、心気の転換や刺戟の料に新らしくしばしば茶を入れかえた。老婢は月に二度以上もひろ子の店を訪ねることが出来た。

ま^まきの言うところによるとひろ子の店は、ひろ子の親の店には違いないが、父母は早く没し、みなし児のひろ子のために、伯母夫婦が入って来て、家の面倒をみているのだった。伯父は勤人で、昼は外に出て、夕方帰った。生活力の弱そうな好人物で、夜は近所の将棋所へ将棋をさしに行くのを唯一の楽しみにしている。伯母は多少気丈な女で家の中を切り廻すが、病身で、ときどき寝ついた。二人とも中年近いので、もう二三年もして子供が出来ないなら、何とか法律上の手続をとって、ひろ子を養女にするか、自分たちが養父母に直るかしたい気組みである。それに茶店の収入も二人の生活に取っては重要なものになっていた。

「可哀そうに。あれで店に在ると、がらり変った娘になつて、からいじけ切つてるのでございますよ。やつぱり本親のない子ですね」とまきは言った。

私は、やつぱり孤独は孤独を牽^ひくのか。そして一度、老婢とその少女とが店で対談する様子が見たくなった。

その目的の爲めでもなかったが、私は偶然少女の茶店の隣の表具店に写経の巻軸の表装を誂^{あつち}えに行つて店先に腰かけていた。

私が出たより先に花屋へ使いに出したまき、が町向うから廻って来て、少女の店に入った。大きな「大経師」と書いた看板が距てになっているので、まきには私のいるのが見えなかった。表具店の主人は表装の裂地きれじの見本を奥へ探しに行つて手間取つていた。都合よく、隣の茶店での話声が私によく聞えて来る。

「何故、今日はあたしにお茶を汲くんで出さないんだよ」

まきの声は相変わらず突つかかるようである。

「うちの店じゃ、二十銭以上のお買物のお客でなくちゃ、お茶を出さないのよ」

ひろ子の声も相変わらず、ませている。

「いつもあんなに沢山の買物をしてやるじゃないか。常顧客おとくいさまだよ。一度ぐらい少ない買物だつて、お茶を出すもんですよ」

「わからないのね、おばさんは。いつもは二十銭以上のお買物だから出すけど、今日は茶滓ちやくすこ漉としの土瓶どびんの口金一つ七銭のお買物だからお茶は出せないじゃないの」

「お茶は四五日前に買いに来たの知つてるだろ。まだ、うちに沢山あるから買わないんだよ。今度、無くなつたらまた沢山買いに来ます。お茶を出しなさい」

「そんなこと、おばさんいくら云つても、うちのお店の規則ですから、七銭のお買物のお客さまにはお茶出せないわ」
「なんて因業な娘っ子だろう」

老婢は苦笑しながら立ち上りかけた。ここでちよつと私の心をひく場面があった。

老婢の店を出て行くのに、ひろ子は声をかけた。

「おばさん、浴衣の背筋の縫目が横に曲つていてよ。直したげるわ」

老婢は一度「まあいいよ」と無愛想に言ったが、やつぱり少し後へ戻つたらしい。

それを直してやりながら少女は老婢に何か囁ささやいたようだが私には聞えなかった。それから老婢の感慨深4そうな顔をして私の前を通つて行くのが見える。私がいるのに気がつかなかつたほど老婢は何か思い入つていた。

ひろ子が何を囁いて何をまきか思い入ったのか家へ帰ってから私が訊くと、まきは言った。

「おばさん御免なさいね。きょう家の人たち奥で見ているもんだから、お店の規則破れないのよ。破るとともうるさいのよ。判って」ひろ子はまきの浴衣の背筋を直す振りして小声で言ったのだそうである。まきはそれを私に告げてから言い足した。

「なあにね。あの悪戯いたずらつ子がお茶汲んで出す恰好が早熟ませてて面白いんで、お茶出せ、出せと、いつも私は言うんで御座いますかね、今日のように伯母夫婦に気兼ねするんじゃ、まったく、あれじゃ、外へ出て悪戯いたずらでもしなきゃ、ひろ子も身がたまりませんです」

少し大きくなったひろ子から、家を出て女給にでもと相談をかけられたのを留めたのも老婢のまきであったし、それかと言って、家にて伯母夫婦の養女になり、みすみす一生を夫婦の自由になってしまふのを止めさせたのもまきであった。私の家の蔦の門が何遍か四季交換の姿を見せつつある間に、二人はそれほど深く立入って身の上を頼り合う二人になっていた。⁽⁵⁾孤独は孤独と牽き合うと同時に、孤独と孤独は、もはや孤独と孤独とでなくなつて来た。まきには落着いた母性的の分別が備わつて、姿形さえ優しく整うし、ひろ子にはまた、しおらしく健気けんげな娘の性根が現われて来た。私の家は勝手口へ廻るのも、この蔦の門の潜戸から入つて構内を建物の外側に沿つて行くことになつていたので、私は、何遍か、少し年の距つた母子のように老女と娘とが睦むつび合いつつ蔦の門から送り出し、迎えられる姿を見て、かすかな涙を催したことさえある。

老婢は子供の時分に聞いた、上野の戦いの時の、傷病兵の看護人が男性であったものを、女性にかえてから非常に成績が挙るようになつた看護婦の起源の話（これは近頃、当時の生存者がラジオで放送した話にもあつたが）を想い出した。また自分の体験から、貧しい女は是非腕に一人前の専門的職業の技量を持つていなければ結婚するにしろ、独身にしろ、不幸であることを諄々じゆんじゆんと諭5して、ひろ子に看護婦になることを勧めた。そして学費の足しにと自分のお給金の中から幾らかの金を貢みつぎながら、ひろ子を赤十字へ入れて勉強させた。

私の家は、老婢まきを伴って、芝、白金から赤坂の今の家へ移った。今度は門わきの塀に蔦がわずかに搦んでいるのを私が門へ蔓を曳きそれが繁りに繁ったのである。

まきはすっかり老齡に入つて、掃除や厨のことは若い女中に任せて自分はただ部屋に寝起きして、ときどき女中の相談に与ればよかつた。

しかし、彼女は晩春から初夏へかけて蔦の芽立つ頃の朝夕二回の表口の掃除だけは自分です。母子の如く行き交うひろ子との縁の繋がり始まりを今もなお若蔦の勢よき芽立ちに楽しく顧る為めであろうか。緑のゴブラン織のような蔦の茂みを背景にして背と腰で二箇所に曲つている長身をやおら伸ばし、箒を支えに背景を見返える老女の姿は、夏の朝靄の中に象牙彫りのように潤んで白く冴えた。彼女は朝起きの小児がよちよち近寄つて来でもすると、不自由な身体に懸命な力で抱き上げて、若蔦の芽を心行くばかり摘み取らせる。嘗ては、あれほど摘み取られるのを怒つたその蔦の芽を——そしてにこにこしている。まきも老いて草木の芽に対する愛は、所詮、人の子に対する愛にしかずというような悟りでも得たのであろうか。

私は、それを見て、どういうわけか「命なりけり小夜の中山——」という西行の歌の句が胸に浮んでしようがない。

(岡本かの子「蔦の門」より。出題の都合上、一部改変している。)

注1 潜門——正門の横などに設けられた、くぐつて出入りする戸。

注2 老婢——家庭などに住み込んでその家の主人に仕え、家事・雑事をする、年老いた女性。

注3 刺戟——ここでは「刺激」に同じ。

注4 大びら——人目をはばからないでするさま。おおつびら。

注5 牽く——ここでは「引く」に同じ。

問一 傍線部①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。

問二 傍線部(1)「和やかな一面」とは、どのようなことを指しているか、具体的に説明せよ。

問三 傍線部(2)「やはり不人情の一言にはかなり刺戟を受けたらしい」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア すべてのものから孤独へほうり捨てられた「まき」にとって、「不人情」だという「ひろ子」の指摘は不意を突くものであったが、確かにその通りだと感じてしまったから。

イ すべてのものから孤独へほうり捨てられた「まき」にとって、蕙の芽を切った犯人を言わせることは「不人情」でも何でもないが、「ひろ子」にとってはそう見えることに感心させられたから。

ウ 蕙の芽を切ったのは誰かという「まき」の詰問に対して、早熟な口調で「不人情」などという子供らしくない言葉を「ひろ子」が返答してくることに驚き、あきれ返ってしまったから。

エ すべてのものから孤独へほうり捨てられた「まき」は、せめて「人情」のある人間として生きていこうとしていたが、子どもである「ひろ子」に見透かされた気がして恥ずかしかったから。

オ 「まき」は蕙の芽を切った犯人は「ひろ子」だと疑っていたが、犯人が別にいるということがわかり、「ひろ子」を疑ってしまっただけで自分が「不人情」な人間だということになってしまったから。

問四 傍線部(3)「老婢は、大びらでひろ子の店に通い」とあるが、「まき」が「大びらで」通うようになった理由を説明せよ。

問五 傍線部(4)「老婢の感慨深そうな顔」とあるが、「まき」が「感慨深そうな顔」をした理由を説明せよ。

問六 傍線部(5)「孤独は孤独と牽き合うと同時に、孤独と孤独は、もはや孤独と孤独とでなくなって来た」の意味として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 二度の結婚をしたがうまくいかず、老いて「私」の家で働く「まき」の孤独と、伯母夫婦にうるさく言われて気兼ねしている「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、「まき」には分別が備わり、「ひろ子」はしおらしく健気な性格になったという事。

イ 蔦の芽にいたずらをする子供がいなくなり寂しく思っていた「まき」の孤独と、父母を亡くし、伯母夫婦の前ではいじけていた「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、まきには分別が備わり、ひろ子はしおらしく健気な性格になったという事。

ウ 正直だが時にはいこじにも感じられる性格のため生じた「まき」の孤独と、年の割にませて大人びた性格のため生じた「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、二人は年の離れた母子のように睦まじい関係になったという事。

エ 身寄りとは仲たがいをし、夫や子どももない「まき」の孤独と、父母を亡くして伯母夫婦に遠慮しながら暮らしている「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、二人は年の離れた母子のように睦まじい関係になったという事。

三、次の文章は、A『大和物語』とB『老のすさみ』である。これを読み、後の問いに答えよ。

《A》

おなじ帝の御時、躬恒を召して、月のいとおもしろき夜、御遊びなどありて、「月を弓はりといふは、なにの心ぞ。」^②そのよしつかうまつれ^③とおほせたまひければ、御階のもとにさぶらひて、つかうまつりける。

照る月を弓はりとしもいふことは山べをさしていればなりけり

禄に大袿かづきて、また、

白雲のこのかたにしもおりゐるは天つ風こそ吹きてきつらし

《B》

ア 御階のもとにもの申す人

イ 君のめす歌をはるかに聞こえあげ

心は、大和物語に、躬恒を御階のもとに召して、月を弓張といふはいかに、とおほせ侍りし時、照る月を弓はりとしもいふことは山端さしていればなりけり、といふ心にて付け侍るなり。^⑧一句は、いづれの世にも歌をめす事侍ればなり。聞こえあげとは詠進する事なり。しかも聞こえあげといふ詞は、忠岑長歌に、「身は下ながらことのはを天つ空まで聞こえあげ」、といふ詞をとりて、句を作るなり。^⑩かやうの事、もつとも粉骨なり。連歌は才覚なくては叶ふべからず。

(本文は、Aは高橋正治校注『新編 日本古典文学全集12 大和物語』小学館、一九九四年に、Bは木藤才蔵校注『連歌論集二 中世の文学』三弥井書店、一九八二年により、問題作成上、一部表記を改めた。)

注1 おなじ帝の御時——ここでは醍醐天皇(八八五〜九三〇)の御代。

注2 御階みはし——宮中の正面の階段。

注3 祿に大桂おほうちぎ——褒美として下賜された大きな公家装束。

注4 天つ風——大空に吹く風。

注5 忠岑長歌——『古今和歌集』所収の壬生忠岑の長歌。

注6 連歌——五・七・五の句と七・七の句を交互に詠んでいく形態の詩歌。前の句に続けて詠むことを、句を付けるとい
う。

問一 傍線部①「召し」、④「さぶらひ」、⑧「侍る」の敬語の種類(尊敬語・謙讓語・丁寧語)を特定し、さらに誰から誰に対する敬意を表すのか答えよ。

問二 傍線部②「そのよしつかうまつれ」、⑤「山べをさしていればなりけり」、⑥「白雲のこのかたにしもおりゐるは天つ風こそ吹きてきつらし」を現代語訳せよ。その際、②については「その」が示す内容を明らかにし、⑤と⑥については掛詞に着目すること。なお、⑥は白雲が風に吹き寄せられている情景が詠まれるが、そうした表面上の訳ではなく、帝と躬恒との応答を踏まえた訳に限定して答えよ。

問三 傍線部③「おほせたたまひければ」と⑦「吹きてきつらし」を、例にならって、文法的に説明せよ。例は一行だが、二行で書いてもよい。

例 句(名詞) を(格助詞) 作る(動詞・連体形) なり(断定の助動詞・終止形)

問四 文章《B》によれば、ア・イは文章《A》のエピソードを踏まえた句である。その前提に立ち、次のⅠ・Ⅱを答えよ。

Ⅰ アの「もの申す人」とは、誰が誰に対して何をしている行為か、「申す」の内容を明らかにして説明せよ。

Ⅱ イの「君のめす」とは、誰が何をする行為を指しているか、行為の対象を明らかにして説明せよ。

問五 傍線部⑨「一句は、いづれの世にも歌をめす事侍ればなり」では何を述べているのか。その説明として最も適当なものを、

次のア・エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 一つの御世であっても歌人を召し抱えて和歌を詠進させる行為はあるが、それを踏まえても、イ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくては成立しない。

イ 一つの御世であっても夫婦の間で和歌を詠進する行為はあるが、それを踏まえても、イ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくては成立しない。

ウ 一つの御世であっても和歌を帝に詠進する行為はあるので、それを踏まえば、イ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくても成立する。

エ 一つの御世であっても和歌を帝に詠進し、周囲が耳を立てて聞く行為はあるので、それを踏まえばイ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくても成立する。

問六 傍線部⑩「かやうの事、もつとも粉骨なり」とあるが、そのことを説明した内容として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「はるかに聞こえあげ」という表現は、和歌を身分の低い者にも伝えようとする意味に加えて、忠岑の長歌も引用することで、身分差を感じさせない句の構造にしているということ。

イ 「はるかに聞こえあげ」という表現は、遠い昔に詠まれた和歌が現在にまで伝わったという意味に加えて、忠岑の長歌の表現にも影響を与えたという句の構造にしているということ。

ウ 「はるかに聞こえあげ」という表現は、和歌を宮中のみならずはるか遠くの地方にも届かせる意味に加えて、忠岑の長歌の表現をも引用して、距離感を生み出す句の構造にしているということ。

エ 「はるかに聞こえあげ」という表現は、和歌を帝に詠んで献上する意味に加えて、忠岑の長歌の表現をも引用して、工夫を凝らした句の構造にしているということ。

問七 A『大和物語』が成立した平安時代とは異なる時代に成立した物語を、次のア～エの中から全て選び、記号で答えよ。

ア 『雨月物語』

イ 『うつほ物語』

ウ 『竹取物語』

エ 『平家物語』

オ 『伊勢物語』

四、次の文章は、中国の南北朝時代の詩人顔延之（がんでんし）が子弟のために教訓を記した「庭誥」という著作の一節である。これを読んで後の問いに答えよ。解答は現代かなづかいでもよい。なお設問の都合で訓点を省略した箇所がある。

習之所ズル變①亦ナリ大矣。②豈ダ唯シ蒸シ性ヲ染ムルノミ身ヲ乃チ將ニ移シ智ヲ易ヘント慮ヲ故ニ曰ハク

「与ナル善ルハ人ニ居ルハ如シ入ルガシ芷らん蘭ニ之ニ室ニ久シクシテ而ラ不レ知ラ其ノ芬カをリヲ与レ之化矣スレバナリ。与ニ

不ナル善ルハ人ニ居ルハ如シ入ルガ鮑はう魚ぎよ之ニ肆シニ久シクシテ而ラ不レ知ラ其ノ臭ヲ与レ之變矣ズレバナリト。是④

以ハ古ハ人ハ慎ヲ所ニ与ニ処ヲ唯ダ夫レ金ノゴトク真ニシテ玉ノゴトク粹ナルニシテ者⑥乃チ能ク処リテ而レ不レ汚サ其ノ身ヲ

耳ニ故ハク曰ハク「丹ハ可キモ滅ス而ハ不レ能ハ使ムルカラ無レ赤キコト石⑦可レ毀レ而レ不レ可レ使ムル無レ堅⑧。苟クンバ無ニ

⑨ 丹石之性、必慎ニ浸染之由。

注 ○習——慣れること。 ○蒸性染身——肉体の性質を変える。

○故曰「……」——二箇所とも括弧内が古書の引用であることを示す。 ○芷蘭——香草の名。

○鮑魚之肆——干物を売る店。 ○丹——朱色の鉱物の名。 ○滅——粉々に砕く。

○毀——砕く、壊す。 ○浸染之由——他のものから影響を受けること。

問一 傍線部①「亦」、②「豈」、④「是以」、⑤「慎」、⑧「苟」の読みを、送りがなも含めてひらがなで示せ。

問二 傍線部③「久而不知其芬」とはどのような状況でどうなることを言うか。わかりやすく説明せよ。

問三 傍線部⑥「乃能処而不汚其身耳」を送りがなも含めて全てひらがなで書き下し文にせよ。

問四 傍線部⑦「石可毀而不可使無堅」の現代語訳として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び記号で答えよ。

ア 石は砕くことが可能なので、堅いという性質は無いに等しい。

イ 石は砕くことが可能なので、堅くないものと同様に扱わなければならない。

ウ 石は砕くことはできるが、堅くないものと同じように使用するべきではない。

エ 石は砕くことはできるが、堅いという性質を持たないものとは比べられない。

オ 石は砕くことはできるが、堅いという性質そのものを失わせることはできない。

問五 傍線部⑨「丹石之性」について、この文の中で「丹」「石」と同様の性質を持つとされているものを二つ抜き出して記せ。

問六 筆者はこの中でどのような教訓を述べているか。本文の主旨を踏まえ、七〇字以内で説明せよ。